

クロソイ放流技術開発事業

(要 約)

柳谷 智・塩垣 優・早川 豊

餌料系列の単純化・選別・収容密度の検討等種苗量産技術の確立、沖出しサイズ・選別・網替え方法等網生簀による大量海中中間育成方法を確立するため実施したので、その概要について述べる。

なお、詳細は「平成3年度放流技術開発事業報告書・クロソイ班」(平成4年3月、水産庁)として報告した。

結果の概要

1. 種 苗 生 産

5月6日から5月22日にかけて産仔した仔魚690,000尾を用い、37～57日間の飼育で、100,682尾(平均全長15～23mm)を生産した。平均生残率は13.2%(範囲3.0～22.2%)であった。

餌料はワムシ、アルテミア、魚卵(マダイ、ヒラメ)、配合飼料を使用した。なお、成長差による共食い共倒れがみられた。

2. 中 間 育 成

(北金ヶ沢)

平均全長43.0mmの稚魚30,549尾を北金ヶ沢漁港内網生簀で66日間飼育し、平均全長86.4mmの稚魚22,419尾を生産した。この間の生残率は73.4%であった。標識放流調査のため全数左腹鰭抜去を施し、9月22日北金ヶ沢地先に放流した。

(脇野沢)

平均全長46.5mmの稚魚30,718尾を脇野沢村漁協屋内水槽で59日間飼育し、平均全長83.0mmの稚魚18,372尾を生産した。この間の生残率は88.0%であった。標識放流のため右腹鰭抜去したもの及び、右腹鰭抜去と尾鰭上葉切除したものをそれぞれ半数づつ10月3日脇野沢地先に放流した。

(センター)

平均全長34.0～58.4mmの稚魚21,647尾を当センター屋内及び屋外水槽で55～66日間飼育し、平均全長86.6～88.9mmの稚魚10,085尾を生産した。この間の生残率は59.5%であった。標識放流用として左腹鰭抜去を4,951尾に施し、9月22日北金ヶ沢地先に放流した。